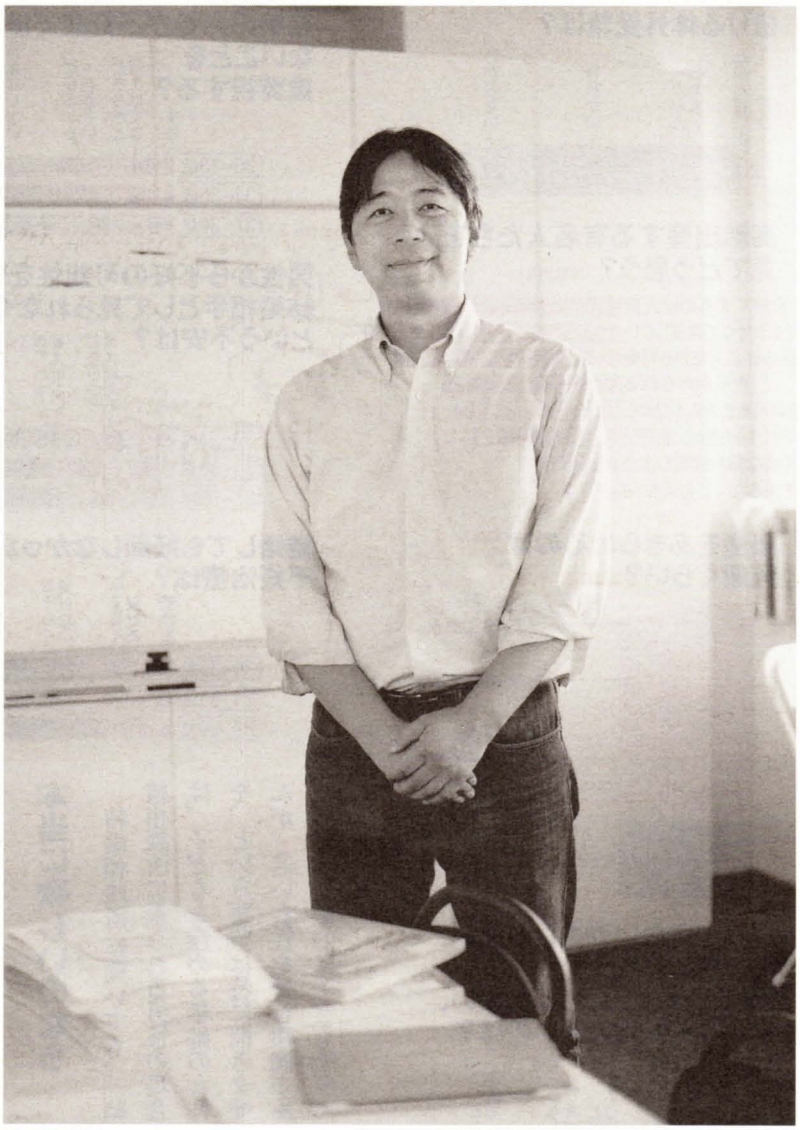
介護で仕事の突破口が開いた

「介護退職」14万人時代のフロントランナー

介護と仕事。二つは両立し得ないものだと考えている人が、大半ではないか。介護退職14万人という数字が、このことを示している。しかし、両立を通り越して、介護をきっかけに仕事で新たな境地に歩を進めた人たちがいた。

編集部　古川雅子　写真　高井正彦



斉藤 淳さん
エール大学助教授➡帰国して英語塾「Logos」代表

上智大学英語学科卒。米国に留学して政治学の道へ。2002年から03年は衆議院議員（山形4区）も務めた。エール大助教授（08～12年）を経て、英語塾を起業

2010年の年末、米国赴任中だった斉藤淳さん（43）の母（64）は、悪性の脳腫瘍と診断された。山形県酒田市の実家で父（65）と暮らしていた。

仕事を辞めて、帰国すべきだろうか。真っ先にそう考えた。できるだけ病身の母のそばにいたいから。でも、仕事もあきらめたくなかった。そこで思いついたのが、日本には帰国するけれど、新たに英語塾を起業するという「もう一つの選択」だ。

斉藤さんは、米国の名門エール大学に留学するなど政治学を研究してきた。一度は政治家を目指して衆院補選に出馬、衆議院議員も務めた。その後、総選挙で敗れ、研究の道を究めようとエール大学に戻る。08年からは助教授として政治学を教えていた。エール大から英語塾って、落差が大きすぎませんでした？

素朴な疑問をぶつけると、「1年間だけでも国会議員を務めたし、アメリカで出した共著論文は政治学の学会賞を取ったし。自分は恵まれたキャリアを送ってきたなと思えたから、吹っ切れたんです」

僕なりのチャレンジ

日本の大学からも誘われたが、「居眠りする日本の大学生を相手にしてもね（笑）。それよりは、生きた英語に接する機会の少ない故郷の子どもたちとか、これからっていう中高生に賭けてみたいと。僕なりの新しいチャレンジなんです」

今年4月、図書館に勤める妻と9歳の長女、1歳7カ月の長男を米国に残し、単身帰国した。

具体的なビジネスプランを練り上げるのに、10カ月かかった。長男が生後3カ月の時に、妻とバトンタッチして半年間の育児休業を取得。抱っこひもを着けて息子をあやしながら、どうしたら介護と両立できるか、収益を上げられるか、考えたという。

帰国直後に、東京・自由が丘と故郷の酒田市の2カ所で開校した。週の半分は山形で過ごし、東京との間を往復する「二住」生活だ。飛行機の移動時間も、教材づくりや授業の準備に忙しい。生徒は口コミで集まり、東京校は当初の倍の45人にまで増えた。酒田校は20人。「滑り出しは上々」（斉藤さん）だ。

母は手術の後遺症もあり、視

野が狭くなっている。本を読んだり一人で外出したりはできなくなった。母がやりにくいことは、父と交代で手伝う。

「介護」のインパクト

父は最近、こうもらした。

「母さん、おまえが帰国する前は、病気を受け止めきれずにふさぎ込んでいたけれど、そういうことがなくなったなあ」

そんな母の変化が、今の斉藤さんの励みになっている。

総務省の07年版「就業構造基本調査」によると、家族の介護や看護を理由とした離職・転職者数は、約14万5千人。4年前と比べて、男性は1・5万人から2・6万人に増え、増加率は1・74倍。女性の1・53倍を上回り、介護と経済の問題はもはや、男性にとっても重要な課題であることが浮き彫りになった。

親を支えたいと思う一方で、子の側は、時間、仕事、お金、住む場所などにまつわるあらゆる「制約」を自分は「受容」できるのか、と悩む。

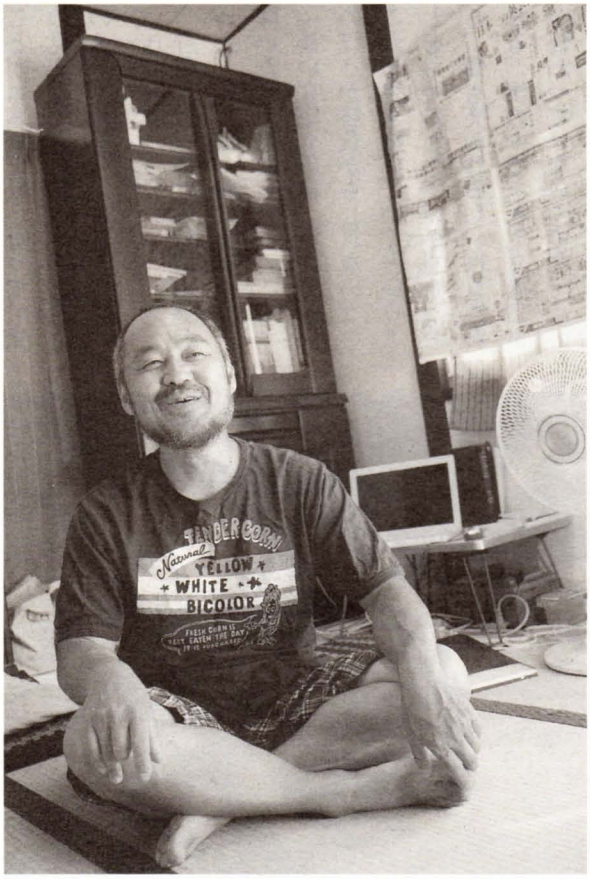
岡山県に住む、フリーライターの野田明宏さん(56)は、30代後半にまず父を3年間介護してみとり、その後、アルツハイマー病を発症した母を在宅で10年、介護する生活を続けた。

独身で、ひとりっ子。海外を放浪していたツケで、お金もなかった。グアテマラで小商いを始めようと、日本に一時帰国して資金稼ぎのアルバイトをしていた時に父が倒れて入院し、その夢もついえた。

最初は、自分は親の犠牲になっているという思いしかなかった。けれど、介護のために仕方なく父が入院していた病院に居つくうち、介護はライフワークになると直感した。

家族の中でも入り交じる感情。医療・介護者の本音。下の世話にいらだち、親に手を上げ、「介護地獄」を地でいく自分。直後に反省し、気分はジェットコースターのように乱高下する。

「世界50カ国を放浪し、何でも見てきたつもりだった。その自分が度肝を抜かれるくらい、介護の世界はインパクトがあった」



野田明宏さん
世界50カ国を放浪➡介護ライター
中米から一時帰国中に父親が倒れ、介護生活に突入。その後は、母親を在宅で介護しながら執筆活動に従事。著書に『アルツハイマーの母をよろしく』などがある

6人部屋の父の病室で、野田さん以外、男性の介護者はいなかった。今でこそ珍しくないが、野田さんは「走り」といえる。誰も経験していないからこそ記録を残そう――。

必要なのは「自由」

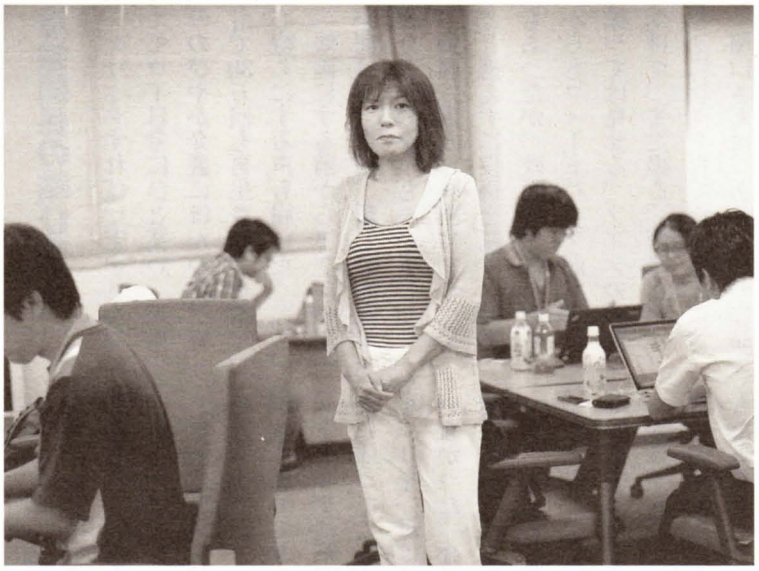
最初の介護ルポは自費出版した。17年前で80万円弱。その資金は、まだ元気だった母が工面してくれた。

「このお金はあんたへの投資なんじゃから、書き続けてよ！」

母の言葉が胸にある。それに、内戦下のエルサルバドルで、政府軍に随行して取材活動を始めたものの、「怖くなって撤退した」心残りもあった。

書くことをやめない。そう決めて、男手ひとつで母を介護した生活のありのままも、新聞や著書で発表してきた。下の世話のことも、赤裸々に。「母親をネタにするのか」と批判も浴びた。著書にはこうつづる。

〈もし、私に書くという現実がなかったら、私は母の介護を継続できなかったような気がしてならない。（中略）書くという



森下ことみさん
主婦➡SOHO支援サービス会社「そーほっと」代表
大学卒業後、専業主婦生活10年ののち、1998年にSOHO支援施設にパートとして就職。2004年に起業／コワーキングプロジェクト ミタカフェで

photo 前田博史（上）

ことがエネルギーとなって、先の見えない五里霧中の介護生活のメンタル部分をささえてくれているのだから〉

今年3月、母との時間は終わった。いまは、胸にぽっかりと開いた穴が埋まらない。

「長い在宅介護は、済んでからのほうが勝負かもしれない。ここから生き抜いていくということをちゃんとしていかなかったら、僕も笑われるし、母も笑われる。僕の中で、在宅介護はまだ終わっていないんです」

家族の介護を担う人に、いわゆる「会社勤め」は困難を伴う。必要なのは、介護を必要としている家族の都合に合わせられる「自由」。斉藤さんと野田さんが、起業やフリーランスという道を選んだように、森下ことみさん(49)も04年、ビジネス支援会社「そーほっと」(東京都三鷹市)を立ち上げた。

16年前に、広島に住む義母をみとった。その時は専業主婦。夫は仕事で東京に張り付いていなければならず、義母の介護は森下さんに任された。東京と広島を行き来する遠距離介護を続ける中で、

「いずれは働きたいけど、親の介護をする機会は必ずまた訪れる。その時、遠距離介護生活と仕事を両立できるのかしら……」

という思いが生まれた。どうせ仕事を見つけるなら、「人に使われない働き方」がいい。そう考えるようになった。

介護の日々をシェア

1998年に、1人から数人規模のSOHO9社が入居するオフィスでパートタイムの受付事務を始め、彼らの働きぶりを見るうちに「主婦だって、会社を作れるんじゃない?」と思い至った。森下さんを含む主婦3人で、合計300万円を出資して起業した。

社名は「SOHOがほっとする」という意味。独立・起業に踏み切った人たちが必要とする受付、電話転送、私書箱サービス、名刺入力、住所録管理……など、あらゆる支援業務を請け負っている。売上高は、190万円強にまで伸びた。

ところかわって、横浜・本牧。29年ぶりにオーストラリアから帰国した娘が、母と一つ屋根の下で暮らし始めた。

「トイレットペーパー使いすぎじゃない?」

「あっ、シチューを火にかけて二度寝してる!」

映画監督の関口祐加さん(55)の最新作「毎日がアルツハイマー」には、娘である関口さん目線の「母の一日一笑」が満載だ。今年7月から全国の劇場で順次公開されているが、母宏子さん(81)の日常は、実は映画が公開される前からたくさんの聴衆にシェアされていた。作品になる前の数分単位のムービーを2年前から、動画投稿サイト「YouTube」にアップし続けていたからだ。

関口祐加さん
オーストラリアで映画監督デビュー➡帰国して介護生活を新作「長編動画」に

デビュー作「戦場の女たち」でメルボルン国際映画祭グランプリを受賞。オーストラリアで結婚、出産、離婚を経験。中学1年生の息子は別れた夫とシドニーで暮らす。2010年に帰国/東京・銀座シネパトスで

母娘関係の結び直し

クリックすれば、宏子さんのオモロイ日常にひと笑い。家族ののびやか介護にほんわか。累計で30万回も再生され、長編を心待ちにする声も届いた。

「映画にする前からファンの声が聞ける。今回、新しい映画の作り方がわかっちゃいました」

「動画は素人、映画はプロ」などと構えずに投稿を続け、批判もあったが、映画業界以外の人からもフィードバックがあった。撮っては見せる。ファンの声を受けて、また撮る。聴衆といっしょに映画を育てた感覚だ。

関口さんは、あえてこの作品を「長編動画」と呼んでいる。映画の世界に、新しいジャンルを作っちゃいましたよ、というさりげないアピールでもある。

認知症介護の現場を世間にさらすこと自体、日本では珍しい。

「まさに、カミングアウトです」

宏子さんが風呂に入りたくないというなら、入らなくていい。引きこもりがちになったら、あらまあ。でもやっぱり気になって訪問看護師に応援を頼んだら、やっと脱いだ靴下から肉に食い込むほど伸びきった爪。爪切りを訪問看護師に任せ、その様子も撮った。

「ちゃんと介護していない」と批判されるのは承知の上で、娘である自分の向き合い方もさらけ出した。

世間体を気にして弾けることのできない母を、関口さんはがゆく思ってきた。一方、オーストラリアに飛び出したまま一向に帰ってこない娘の勝手きままぶりを、母は、面白く思っていなかった。介護を機に母娘の関係の結び直しもできた。母はいま、喜怒哀楽を素直に表す。

「その母の感じがすごくいい。だから撮りたいと思ったんです」

介護が開いた仕事の突破口。親子関係にも、同じ「作用」をもたらした。

※映画「毎日がアルツハイマー」は、9月15日から東京のポレポレ東中野で公開される